

## 【特集】人生・生活・社会の「幸福／well-being」を考える

—現代行動科学会第35回大会テーマセッションから—

### 為すべきことを為す

久保 優司（ふくしま中央森林組合）

平成元年に卒業後、24年間、盛岡地方検察庁に勤務した。平成25年4月、福島県に移住して林業に転職。妻は行動科学の後輩で、共に移住し、福島県内でスクールカウンセラーをしている。

私にとっての幸福／well-beingは、為すべきことを見つけ、それに向かうこと、それ自体だと思っている。

検察庁時代、11年間を検察官事務取扱として捜査、起訴・不起訴の事件処理、公判に従事していた。捜査の目的は、事実認定と適正な処分をすることにあるが、私は、被疑者や被害者が抱えてしまった心の「負」の部分を少しでも減らすことも検察官の役割と考え、罪の意識が希薄な被疑者にはその重さを納得させ、怒りや恨みの心を膨らませた被害者の心を平穏に戻すために仕事をしていた。深夜の帰宅や土日出勤が当たり前であり、苦しいことも多々あったが、為すべきことを為していることで充実していた。

3.11の災害が起き、沿岸部にがれき撤去のボランティアに通い、その後、福島県に除染ボランティアに通った。茫然とする被災者にがれき撤去は酷であり、原発事故による被害回復を被害者が行うのは理不尽で、加害者若しくは他地域の者が被害回復にあたるべきと考え、これも自分の為すべきことと思って活動していた。

林業の仕事に就き、木や自然が、生命体全ての命の根源であることを実感した。また、命を育て、奪う仕事であると共に、自らの命を危険にさらす仕事であることから命の尊さに気付かされた。さらに、時間軸の長い（50～100年）仕事なので、今を生きる意味は、過去から受け継いだものを後世に残すことであることを理解した。それで、今私が為すべきことは、木や自然の大切さを多くの人に理解してもらう活動やそれを通じて命の大切さを訴えること、整備が止まって「負」の遺産になりかねない森林の整備をすすめること、そのために林業を再興すること、また、里山の子供たちが地元を誇りを持てるようにすることだと考え、活動を始めている。

ところで、為すべきことに向かっていけるのは、周囲の環境があつてこそだと思う。経済的な事情を含めた家族の理解はもちろん、職場での容認が不可欠である。そのためには、自身の周囲に認めてもらえるほどの普段の努力、姿勢がなければかなわないことと思う。